

景観フォーラム

巻頭言

新型コロナウイルスの暴走が止まりません。中国武漢から始まり、3、4か月経過した現在、瞬く間に全世界に蔓延してしまいました。このウイルスという生物はグローバル化した世界には非常にその相性がいいみたいです。いつでも、どこでもあらゆる生命体に寄生し、食い尽くしたその生命体が死を迎えるとウイルス自身も一緒に無に帰すという原理はまことに単純で分かりやすい在り方です。ウイルスという種はどこかで生き続けるわけですから、単体で考えることはないわけです。個体の生命という考えには意味はなく、どこかに寄生することでその存在証明になるわけです。生命としての始まりの意義はウイルスにあるわけですから、生命進化の最上にいる人類にとって、このウイルスという存在をどのように考えるかによって我々自身の存在への問いかけとなるのではないのでしょうか。

とはいえ、今回の新型コロナウイルスに感染すると感染者の2割が重篤に陥り、場合によっては死が待ち受けているということです。3月30日現在、全世界で感染者数はこの2か月で68万人超、死者も3万人を超えている現在、これはほぼ100年前に発生したスペイン風邪（2年間で5億人の感染者数、死者5千万人）の二の前になるのではないかと疑わざるを得ません。たかが風邪ではないという証明に、このほどコメディアン志村けんがこの新型コロナウイルス感染で死に至りました。あの元気な人がと思うと、たちまち大変な恐怖感が沸き起こるのは私のみではないでしょう。この感染症はいつでもどこでも、死が待ち受けているのだという恐怖感です。

さて、このような伝染病に打ち勝つにはどうしたらいいのでしょうか。外出しないこと。他人との接触を徹底的に避けること。このポイントを守れば、何とかできるのではないのでしょうか？ 従いまして、残念ながら、この2、3か月は当団体の活動は休息せざるを得ません。5月6月ごろになれば皆さんの元気な顔を拝顔できますことを期待して、徹底的に長めの読書に専念したいと思います。また、下記には本年のおおよその活動の概略を記入しておきましたので、スケジュールなどこんな事あんなことにお気づきの方は是非とも、メールないしは電話にてお尋ね頂ければ幸甚でございます。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2020年度年間スケジュール>

*2020年度とは2020年4月1日⇒2021年3月31日のことです。

2020年

- 4月24日（金）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月21日（木）**第1回景観研究会**（東京の景観）於JICA研究所
- 6月28日（日）**第1回景観まちあるき**（東京都内：？）
- 7月22日（水）**第2回景観研究会**（東京の景観まちづくり） 於JICA研究所
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？
- 9月25日（金）**第3回景観研究会**（東京・？の景観）於JICA研究所
- 10月18日（日）**第2回景観まちあるき**（東京・？）
- 11月20日（金）第2回理事会・**第4回景観研究会** 於JICA研究所
- 12月17日（木）忘年会（？の居酒屋）

2021年

- 1月21日（木）**第3回景観まちあるき**（？）
- 2月18日（木）**第5回景観研究会**（丸の内）於JICA研究所
- 3月28日（日）**第4回景観まちあるき**（未定）

★以上の年間スケジュールは第一回理事会の承認の上実施されます。

昭和のまちさがし

豊村泰彦

第1回～はじめに

平成から令和に時代が変わってまだ1年しかたっていないのに、今や日本で、いや世界で早くも天変地異が起こっています。言うまでもなく新型コロナウイルスによる感染のパンデミックです。そのことからしても令和の時代というのは、平成のような比較的平安だった時代ではなく、日本人を含めた人類の生存にとって恐怖と絶望に晒され続ける暗黒の時代の幕開けなのではないでしょうか。

なんて考えていますと、気持ちが暗くなるし、書いても楽しくないので、そのようなことはできるだけ頭から排除し、自分にとって一番面白かった時代、今より希望のあった時代のことを考えます。それは単に現実逃避しているだけと思われるかもしれませんが、まずは精神状態をリセットし、ポジティブになれる自分を取り戻して、改めて、私たちがこの令和時代を快適に暮らしていくための環境や景観について考えていこうと思います。

私がこれまで生きてきて、いい時代だなと思えるのは、昭和の時代のひところ、年代にして昭和30年代から50年代くらいまででしょうか。昭和60年代に入るとバブルの時代に入り、人々は経済的に豊かになった半面、情趣に富んでいるとか、心が落ち着く情景とか、そういうものに目が行かなくなった面があります。都会を中心に高層化が進み、街が急速に変化し、どこでも似たり寄ったりの無個性の街が広がってきました。古い建物や民家は、単にボロいもの、貧しいもので、見捨てられる傾向になりました。低層のビルはどんどん新しい工法による建造物に置き換わり、駅も再開発で高層ビルが建ち並び、街並は一変していきました。大規模な開発によって昭和の時代の景観は崩れていきました。

ところが平成に入りバブルが崩壊すると、ようやく昭和を懐かしむ風潮が少しずつ復活してきたように思います。昭和の街の特徴はどの辺にあるかというと、住宅と商店が混在する町並みです。特に小規模な個人商店や飲食店が軒を連ねる商店街や横丁といわれる場所はワクワクする雰囲気があります。横丁は今では飲み屋街として残り、酒好きには人気のスポットですが、駅前再開発がすすめられた区域は昔ながらの商店、食堂は閉店に追い込まれ、姿を消しました。そして商業施設とマンションとが共存する複合施設やモールと呼ばれる人工的な街並みに変わっていきました。しかしこういう施設は地域の特徴や古いものへの愛着、人間的な温かみを感じることはできないので、私的にはけっして足が向かない場所です。そのような面白くない街が都心から郊外に向かってどんどん広がっています。東京の下町と呼ばれる場所にはまだ古い街並みがまだたくさん残っていますので、比較的容易に昭和を感じることができますが、山の手や郊外では、駅周辺を中心に痕跡程度にとどまっているの現状です。しかしながらそのような昭和の痕跡を発見することも街歩きの一つの楽しみであります。



柴又～帝釈天商店街

<LFJブックレビュー 66>

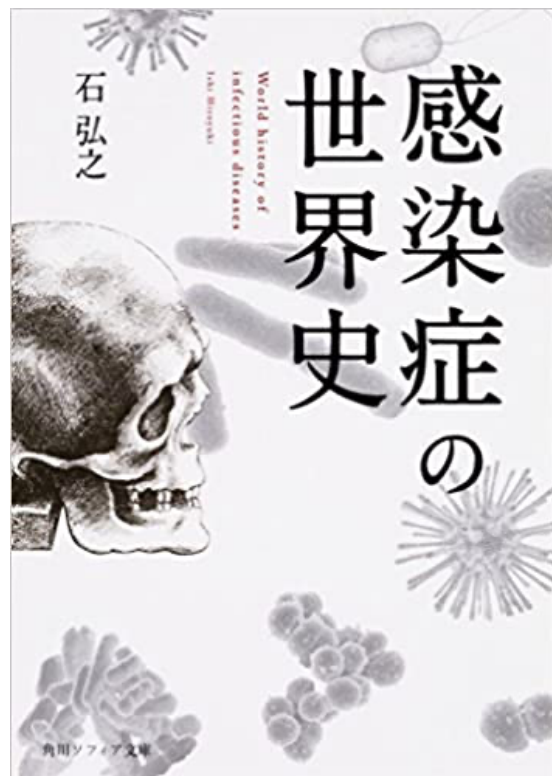
『感染症の世界史』 石弘之著

角川ソフィア文庫2018年刊 単行本2014年刊

本年2020年の春、世界は新型コロナウイルスの猛威に晒されている。昨年末、中国の武漢あたりからウィルスらしきもののニュースがあり、それがこの3月に至って罹患者に死者が出るというような状況に至ってしまった。今現在、世界は今50万人以上の感染者数を出し、死者は2万人を超すという。14世紀のペストの大流行、そして第1次世界大戦を終息せしめたというスペイン風邪。もしかしたら、今回のこのインフルエンザは21世紀の歴史に残る大事件になるかもしれない。

先ず、第1部「20万年の地球環境史と感染症」は第1章が「人類と病気の果てしない軍拡競争史」として人類発祥時から我々がどのように感染症とかかわってきたかの概略を示し、第2章では「環境変化が招いた感染症」として環境の悪化がいかに感染症を生み出してきたかを述べ、第3章では「人類の移動と病気の拡散」として、農業から始まって人類の文明がいかに感染症を引き起こしてきたかを表し、人類がどのようなウィルスとのかかわりを持ってきたかを第2部「人類と共存するウィルスと細菌」で詳述する。第4章「ピロリ菌は敵か味方か-胃がんの原因をめぐって」では共存共栄してきた常在菌の意味を問い、第5章「寄生虫が人を操る-猫とトキソプラズマ原虫」では寄生虫による脳の支配など人間の行動にも感染症がかかわっていることを示し、第6章「性交渉とウィルスの関係-セックスが癌の原因になる?」、第7章「8種類あるヘルペスウィルス-感染者は1億人」、第8章「世界で増殖するインフルエンザ-過密社会に適応したウィルス」、第9章「エイズ感染は100年前から-増え続ける日本での患者数」として人類行動と感染症とのかかわりを具体的に示す。そして、第3部「日本列島史と感染症の現状」では、第10章「ハシカを侮る後進国・日本」では日本人が感染症に対していかに危機意識が低いを示し、第11章「風疹の流行を止められない日本」、第12章「縄文人が持ち込んだT細胞白血病」、第13章「弥生人が持ち込んだ結核」として生活の中にある感染症と日本人の関係を明らかにする。そして終章として「今後、感染症との激戦が予想される地域は?」として中国がいかに感染症の巣窟になりうるかを示しており、まさに今回の新型コロナウイルス蔓延の的確な予言となっている。

さて、著者は、朝日新聞社で環境問題に健筆を振ってきたジャーナリストであるが、「地球に住むかぎり、地震や感染症から完全に逃れるすべはない。地震は地球誕生からつづく地殻変動であり、感染症は、生命誕生からつづく生命進化の一環である。」と指摘し、「微生物は、地上最強の地位に上り詰めた人類にとってほぼ唯一の天敵である。同時に、私たちの生存を助ける強力な味方でもある。」と述懐するとき、その脳裏にあるのは人類という進化の頂点に立つものと進化の始まりを示した生命の原点である微生物との関係を根本的に問いかけている。21世紀になった現在、環境破壊が鎮まるどころか、増々その速度を速めている現況において、環境問題とはまさに進化の問題を問うことにその根源的問いかけが存在するのではないのか。そしてまた、「生命とは何か?」を問うきっかけにしなければならないのが人類の責務ではないだろうか。(斉藤全彦)



天地玄黄 NO.23 「さいたまの観光②」

さいたま市岩槻人形博物館



人形のまち岩槻に、2020年2月22日オープンした人形をテーマとした日本初の公立博物館。展示室は3つあります。人形製作の道具や材料などが展示され、映像により人形作りの様子を見ることができる展示室1のほか、日本画家で人形玩具研究家の西澤笛畝（にしざわてきほ 1889～1965）コレクションをはじめとした日本人形をご覧いただける展示室2があります。

また、展示室3では、様々なテーマにもとづく特別展・企画展の開催を予定しています。ミュージアムショップやカフェなどの無料で入館できるエリアもあり、会議室ではワークショップなどが開催されます。博物館に隣接して「にぎわい交流館いわつき」もあります。お土産やカフェ、博物館の展覧会と関連したイベントが開催されます。さいたま市観光は人形のまち岩槻へ！岩槻人形博物館と共に、人形のお店やイベント、史跡めぐりで観光してください。

<利用案内>

開館時間	午前9時～午後5時（入館は閉館時刻の30分前まで）
定休日	月曜日（休日の場合は開館）、年末年始（12月28日～1月4日） ※臨時に休館・開館することがあります。
入館料 利用料	一般¥300円（200円）、 高校生・大学生・65歳以上¥150円（100円）、 小学生・中学生¥100円（50円） ※（ ）内は20名以上の団体料金 ※年間パスポートあり

<アクセス>

さいたま市岩槻区本町6-1-1

TEL.048-749-0222

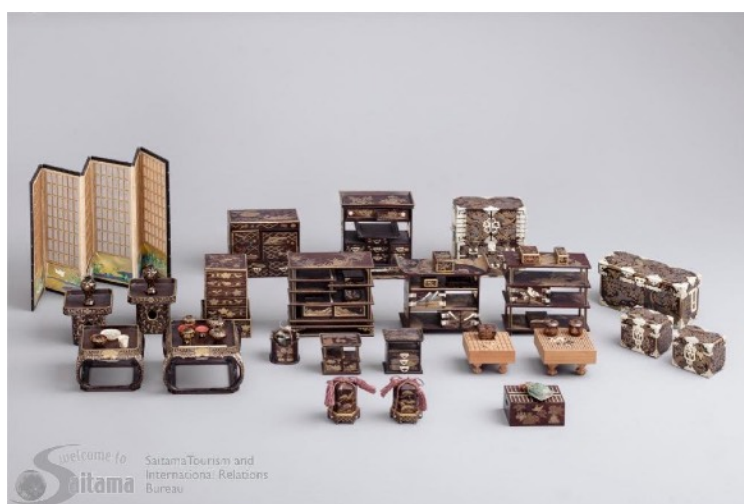
FAX.048-749-0225

東武アーバンパークライン（野田線）「岩槻駅」から徒歩約10分

■駐車場

普通自動車用28台、車いす用2台、大型バス用2台分の乗降スペース

※にぎわい交流館いわつきの共用



〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

